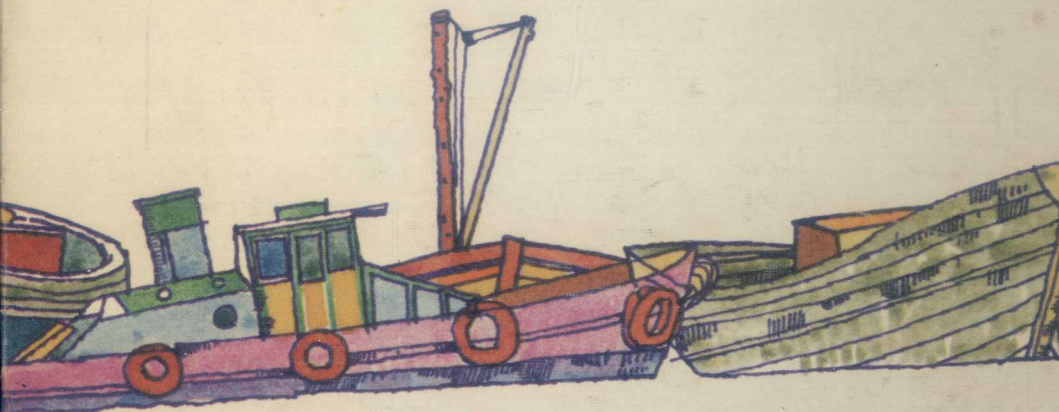


港の見える町

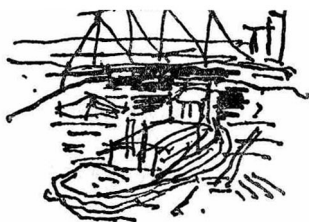
大野哲郎



港の見える町

大野哲郎





NDC 913

8093-064002-7764

ポプラ社の創作文学 2

港の見える町

定価五五〇円

著者 おおの てつろう
大野哲郎

発行 昭和四十五年三月三十日 ©

発行者 久保田忠夫

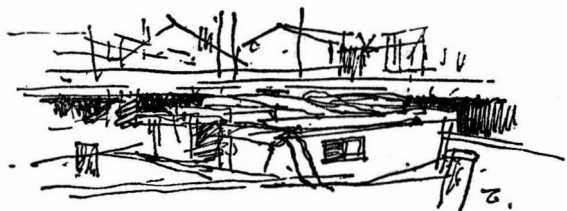
発行所 株式会社ポプラ社

東京都新宿区須賀町五(丁)一六〇
振替東京一四九二七一

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 石毛製本株式会社

著者との話しあいにより検印は省略します。
落丁・乱丁本はいつでもおとりかえます。



はじめに

みどりのない町。

騒音とスモッグの町。

だれもが、じぶんのことを考えるだけで、せいっぱいの町。

冷たい石の町には、やさしさやいたわりの気持ちなんか、用のないものだろうか。

そんな問いかけをしながら、わたしは、すこしずつ、何年もかかって、この物語をかきつけてきた。

大都会のかたすみ、ひっそりと肩をよせあって生きているまじいけれど心ゆたかな人びと――

これは、ひとりぼっちの少年と、みよりのない老人の、物語である。

大野哲郎

もくじ

1	赤いビー玉の夏……………	6
2	ネコの城……………	25
3	お祭り……………	44
4	チヨウの思い出……………	62
5	海に見える公園……………	72
6	マッチ箱の城……………	100



あとがき……………	210
13 ミドリシジミ……………	193
12 たこあげ……………	181
11 焼 ^や けあとの町……………	163
10 エスキモーと白クマ……………	153
9 どうちゃんの病 ^{びょう} 院……………	138
8 あらし……………	121
7 オルゴールの国……………	108

そ
う
て
い
・
さ
し
絵

藤^{ふじ}
沢^{さわ}
友^{とも}
一^{いち}

港の見える町



1 赤いビー玉の夏

「あつ、キタテハチヨウだ。」

次郎は、両手をひろげて、思いきりとびあがる。指さきをさつかすめるキタテハ。明るい茶色のはねが光る。

チヨウを追って、次郎は走りだす。公園をななめによこぎって、市電の通りに入る。チヨウは市電の通りをとびこえ、古びた五階建てのビルのむこうに消えさる。

ビルのむこうの空、自動車の排気ガスに顔をしかめている白い空。

「キタテハって、めずらしくないもん。」

次郎は、げんこをぎゅつとにぎる。目をつむって、ゆっくりと二つのげんこをあわせる。それから、ぱつと開く。

てのひらに、ビー玉が一つ。

すきとおったガラスの空に、まっ赤な花の開いた赤いビー玉。

赤いビー玉に、八月のまばゆい光がきらめく。

次郎は、赤いビー玉を目の高さにかざしてじいっと見つめる。

「こいつあ、王さまだからな。」

交差点を、自転車屋のさぶちゃんが走っていく。次郎はあわてて、ビー玉をポケットにしまう。ビ

ー玉なんか幼児っぽいとさぶちゃんがいう。

「おい、さぶちゃん。」

次郎も交差点を走って渡る。さぶちゃんがふりかえる。さぶちゃんは、左手にグローブをはめて、肩にバットをかついでいる。

「ひとしくんは？」

とさぶちゃんが聞いたとき、次郎のうしろを、すごいスピードでタクシーが走りすぎた。びしっ！
水たまりのどろ水が、背中にかかる。次郎のシャツはどろんこ。

「りょうかい、りょうかい。」

あわてんぼうのさぶちゃんは、次郎の答えも聞かずに、走りさっていく。さぶちゃんは、ときどき
いじわるもするが、さっぱりしたいやつだ。一週間に一度くらい、自転車に乗ってくれる。

「野球をしたいなあ。」

と次郎^{じろう}は思う。野球をするには、グローブがいる。グローブがないと、ボールひろいもさしてもらえない。次郎は赤いビー玉をにぎる。「グローブが」といいかけて、「ほしいなあ」はぐっとつばをのみこむ。

「やめた、と……赤いビー玉は、グローブなんかほしくないんだ。」

次郎の赤いビー玉、それにはひみつがある。

次郎は、赤いビー玉をいつ手に入れたのか、おぼえていない。ずっと前、次郎が、まだ二年生だったかな。それは、えんにちの夜のことなのだ。

次郎は、人ごみにもまれているうちに、とうちゃんとはぐれてしまった。ふと気づくと、いつのまにか、町はずれの、暗い道にまよいこんでいた。

黄色い光の外燈^{がいとう}が、ぼつんとついている。

「おい、そのちび。」

電柱^{でんちゅう}のむこうの暗がりから、しゃがれ声^{かえ}がした。にげようとした。夢^{ゆめ}の中のように、足がすくんで、にげられない。そのうち電柱のうしろから、細い手がずっと出てきた。顔もすがたも、電柱のかげにかくれて見えない。

「ちび、おもしろいものがあるぞ。見たくないのか。」

しゃがれ声はいった。ほねばった手が、おいでおいでをするように動く。次郎はふるえ声で、それでも負けずに大声でいいかえした。

「なんだよ、暗くって、なんにも見えんじゃなか。」

「これさ。」

としゃがれ声が答えた。次郎はすいよせられるように、電柱のほうへ近づいていった。次郎の目の前に、二本の手があわさって、ふいに、ぱっと、二つにわかれる。

むかって右のてのひらに、

「ビー玉？」

「そうよ。赤いビー玉さ。だがな、よく見ろ、ちび。こりゃあ、そこいらにあるもんだあ、ちっとばかり、ものがちがう。」

「ほんと？」

「ちがう。ぜったいちがう。それがなによりしょうこには、だな。この赤いビー玉には、星が二十八もある。ちっとばかり気ままだが、その気にさえなりゃあ、いききたいところへはどこへだって、つれてってくれる。」

「どこへだって？」

「そうよ、どこへだって。」

「かあちゃんのことへでも。」

「かあちゃん？　どこか遠くへはたらきにいつてるのか。」

「死^しんじゃった。」

「ふーん」としゃがれ声がうなった。

「どうしたの。」

「くよくよするなってことさ。このビー玉はな、王さまさ。王さまは氣まぐれだ。氣がむかんと、ねがいごとを聞いてくれん。かあちゃんとかへ、なんていつてもだな、ビー玉がその氣にならなけりや、だめってことさ。だがな、そのかわり、といっちゃなんだが、このビー玉は、ねがいごとを、一つだけ聞きとどけてくれる。その一つのねがいごとがビー玉に氣にしていると。するとな、また、つぎのねがいごとを聞いてくれる。」

「どうしたら、氣にいるの？」

「氣にいるってのはな、いい点をとるとか、勉強をするとか、世間^{せけん}でいいってえのと、ちっとばかりがう。赤いビー玉が、こりや氣にいった、と思わなきやだめなのさ。」

「ふーん」と、こんどは次郎^{じろう}がうなる。



「なあに、そのときは、赤いビー玉が、あせをかく。すりゃあしめたもの。ははん、気にいってるんだな、とわかるしかけになってるのさ。もう一つ、気にいらなときは、その日は、それでおしまい。でも、また、あしたっていう日がある。あしたになりゃ、ビー玉の気もかわろうというものさ。」

次郎は、魔法にでもかかったように、赤いビー玉を見つめた。

「さあて、口上はこれでおしまい。お金もってるかい、ちびは？」

「五十円ある。えんにちのおこづかいにもらったんだ。」

「五十円ぼっきりか。」

しゃがれ声は、ふふくそうにいつて、赤いビー玉をしまいかけようとした。次郎はポケットをさがし

た。工事場でひろった大きなねじはいていた。

「ねじもあるよ。だいにしてるんだ。」

「よし、それでまけといてやろう。こっちの手にのせろ。」

電柱でんちゅうのうしろから、さつきひっこんだ手がすっと出た。次郎はその手に五十円玉とねじをのせた。

「よし、これはぜったいひみつだぞ、ちび。」

「うん、ぜったいひみつだ。」

次郎が手をさしだすと、しゃがれ声がまたいった。

「おっとちび、待ちな……おめえ、なんになりたい？……たとえばさ、宇宙飛行士うちゅうひこうしだとか、先生だとか。」

「ほくはね……」次郎はちょっと考えこむ。

「ほくはね、チョウになりたい。」

「チョウに？ あ、空をひらひらと飛んでくチョウにかい？ へんなものになりてえんだな……なにか、ちびはチョウがすきなのか？」

「だいすき。」

「ふーん……まあいいや、それで話はわかった。赤いビー玉のさいごのねがいは、チョウだ。それが

さいごだぞ……さいごにはな、ちびは、チョウになって空を飛んでいく……」

「さいごには？」

「そうだ、さいごには……おっと、ちび、この五十円玉は……」

しゃがれ声は、ちょっと考えてからいった。

「おめえに、こづかいにくれてやらあ。子どもから金をまきあげたとあっちゃ、おれさまの名がすたるといふもんだ。」

しゃがれ声は、次郎の手に、赤いビー玉とねじと、それに五十円玉をにぎらすと、あばよ、と、暗がりのなかに走りさっていった。

次郎の手にのこされた赤いビー玉。

次郎は、右手に赤いビー玉をにぎりしめて、えんにちの、にぎやかなあかりのほうへ走っていった。
「チョウチョ、ぼくはさいごには、チョウになる。ぜったいひみつなのさ。」

職安しよくあんの屋上おくじょう。

わっと、かんせいがあがる。さぶちゃんがホームランを打ったのだ。

たまは屋上の鉄さくにあたつて落ちる。

たまのあたつた屋上の鉄さくには、次郎のシャツが風にはためいている。さっき、職安のうらでの水道で洗ってきたばかりだ。

「さぶちゃん、すごいなあ。」

そのとき、中央階段の鉄のドアが、ぎいっときしんだ。

「わっ、にげる！」

バットをかついで、さぶちゃんが走る。ボールをつかんで、ひとしくんがつづく。みんなは、巢を見つけられたアリのように、あわてて、非常階段のほうへにげだす。

次郎も鉄さくをよじのぼる。

「屋上で遊んだらいかん。なんというたら、わかるんじや。」

ふりかえった次郎の前に、黒いかげがすつとのびる。口をきゅっとへの字にむすんで、守衛が立ちはだかつている。

「おじい！」

職業安定所、つづめて職安の守衛、三吉じいさんだ。次郎は鉄さくをとびおる。

「浅川先生にいつけてやるか、それとも、こんどこそ、おまわりさんにわたそうか。」